

ここがポイント
企業経営成功への
道しるべ

再生再利用が時代のキーワード。
リサイクル型社会の構築のために、
少しでも役立てればと思います



株式会社 ジェー・キュリアス

企業データ

代表者 神戸 純 (代表取締役社長)
本社住所 〒125-0041
東京都葛飾区東金町1-38-6
TEL 03-5648-2320
FAX 03-5648-2315
設立 昭和63年12月
開業資金 1,000万円
年商 約2億円
従業員数 15名
HPアドレス <http://www.j-curious.com>

リサイクルの プロデュースや コンサルティングをする 会社を目指して

廃食用油回収業を営む神戸商店のグループ会社、株式会社ジェー・キュリアスは、廃食用油のリサイクルをプロデュースしている。店舗が全国にまたがる外食企業などに、廃油を一括管理するシステムを提案し実績を上げている。

いかなる企業も環境問題を無視できない時代になった

「企業がリサイクルを始めるとき、今まで考えていなかったようなコストがかかります。しかし、これを疎かにすると、あとで大変な目に遭います。」と語るのは、株式会社ジェー・キュリアスの神戸純社長だ。

先代の社長が廃食用油のリサイクル業を始めたのは昭和41年だった。神戸商店として学校や空港、ホテルなどの廃油を回収した。

「当時は物資がまだ少ない時代で、資源の有効利用という観点から、廃食用油を回収し、ボイラの燃料や様々な原料として再利用していました。ところが、現在は環境問題に取り組む必要性から廃食用油のリサイクルというものが考えられるようになりました。」と神戸社長は教えてくれた。

食品リサイクル法では、全ての食品関連事業者へ、平成18年までに再利用等の実施率20%以上を目標に掲げている。さらに再生利用が著しく不十分であるときは、罰則まで適用される。

いかなる企業も、再生再利用という時代のキーワードを無視するわけにはいかないのだ。

廃食用油の回収からリサイクルに至る一連のシステムを構築

神戸商店グループでは、ISO14001を2003年11月に取得した。これは、東日本の廃食用油回収業界では第1号となる。

「ISOを取得したからといってすぐに売上げが上がるということはありませんが、環境問題について、ヨーロッパからみると日本はまだまだ



遅れています。特に私たちの事業は、国際基準に合わせる必要があると思ったのです。」と神戸社長は語った。

(株)ジェー・キュリアスは、廃食用油の回収からリサイクルに至る一連の作業をシステムとして構築している。取引先は全国に店舗を持っているファーストフード企業や、レストランチェーン、居酒屋チェーン店、コンビニエンスストアなどだ。あるコンビニ企業では、1,000店舗以上にこのリサイクルシステムを導入し、本部で一元管理している。廃油缶の量や回収日、リサイクル先や再利用の方法など、全てのデータが管理されているのだ。

また、回収業者のネットワークを駆使して全国がカバーできるのも同社の強みだといえる。企業側にとっても一括の窓口で対応してもらえるので、ジェー・キュリアスは便利な存在だろう。

最近では、企業から「リサイクルといっても、何からやればよいのかわからない。」と相談を受けることがある。環境問題の相談に対していろいろとアドバイスしたり、提案したりするうちにリサイクルのコンサルティングをするようになったという。

回収した廃食用油は、再生工場で分類・再加工して、脂肪酸などに再生し、せっけんや飼料の原料として専門メーカーに提供する。その他にも、発泡スチロールや整髪料、タイヤ、ゴムなどあらゆるものになる。廃食用油は、今では様々なリサイクル技術が研究され、再利用の方法も幅広くなった。そのおかげで廃油の価値も上がった。

食品リサイクル法では、約20%のゴミを削減しなければならないのだが、後発の企業はリサイクルやゴミ処理の設備をほとんど持っていな



いのが現状だ。困惑している経営者も多いのではないだろうか。

廃油だけでも相当量のゴミが削減できるし、廃油のリサイクル品は多種多様にある。せっけんなど廃油のリサイクル製品を再び店舗で使用するということもできる。まずは廃油処理から始めるという企業も多い。大企業だけでなく、中小企業の中にも環境問題に、どう取り組むかを真剣に考える経営者が増えてきたようだ。

小さなポジティブを、 積み重ねていきましょう！

東京湾で問題になっているオイルボールが、美しい沖縄の海にも流れ着いているという。オイルボールというのは、海上に流出した廃油にゴミや不純物が混じって塊となり、徐々に硬化して固形状になったものだ。このオイルボールによる海洋汚染が今大変な問題になっている。

海に流れる廃油の半分は企業系の油だが、あとの半分は家庭用である。「家庭用の廃油の回収も積極的に行っています。公園などに拠点を設けて、そこに油を貯めておいてもらって回収するのですが、それには地域のリサイクル団体やNPOなどの協力が不可欠です。」と、家庭用の廃油回収は儲けを度外視した活動だが、それでもやっていかなければいけないのだと神戸社長は言う。廃油による海洋汚染の問題がある以上、廃油回収業者が黙って見ているわけにはいかないようだ。

「昔は日本にもモノを大切に作る心があった

ように思います。しかし、それがいつの間にか薄れてきました。そういう気持ちを大切に、リサイクル型社会の構築のために、少しでも役立てればと思っています。」と神戸社長は社会活動への思いを語った。

先代が廃油の回収業を始めたきっかけは、大阪万博が開催された年、日本に初めてファーストフード店が上陸し、その店の裏側に廃油缶が山積みになっている状況を目撃したことだった。それで、資源の有効利用をしようという事業を立ち上げた。

廃油はいろいろな原料に分けられ、軽油の代替燃料としても活用される。海外に輸出するためにタンカーにいっぱい積み込んだこともある。その時には、全国の廃油回収業者が力を結集してタンカーをいっぱいにした。

同業者の組合活動にも積極的に参加していった。競争から協業へ、そして共存共栄のビジネスモデルを模索し、全国の廃油回収業者をネットワークするシステムを構築した。

神戸商店グループでは、大量の廃油を回収しているが、現場では一つひとつの廃油缶を運んでいるのだ。階段を駆け上り、重く汚い廃油缶を運ぶ。ひっくり返したり、こぼしたりすると掃除をしっかりとっておかなければいけない。神戸社長は、自らの信条をこう語った。「努力も仕事も積み重ねが大事です。不景気だからといって諦めず、小さなポジティブをしっかりと積み重ねていきましょう。」

小事が大切だ。小さな善意を積み重ねていけば、地球の環境問題もきっと解決することだろう。同業他社のライバル会社が儲ければ自分の取り分が減ると考えるのが人の常だが、同社は互いに分かち合うことで全国に廃油回収業のネットワークを構築した。また、ISOを導入し敢えて厳しい基準を自らに課した。さらには、儲けに結びつかない家庭用廃油の回収にも乗り出した。こうした小さなポジティブの積み重ねが中小企業の明日を開くのもかもしれない。

(文：池田 貴典)